

聴覚障害者に対する態度変容における映像法の効果

徳田 克己

本研究では、保育者養成校の授業の一時限を用いて、聴覚障害者を取り扱った映像（テレビ番組の録画）を視聴することの態度変容効果を確認することを目的とした。

19歳から21歳までの幼児教育系短期大学の女子学生81名を被験者とした。聴覚障害児・者に対する態度を測定する尺度として、「障害児・者の態度を測定するための多次元的态度尺度：聴覚障害版」を用いた。全体的にみると、テレビ番組の視聴によって、聴覚障害児・者に対する態度は好意的な方向に変容する結果となった。次元別に態度をみると、「拒否的態度」「統合教育」「自己中心性」「交流の当惑」の4つの次元では改善がみられたが、「特殊能力」では有意な尺度得点の変化が認められず、聴覚障害者は特殊能力を持っているという誤った認識は改善されなかった。本研究によって、聴覚障害児・者に対する態度変容における映像法の有効性を確認できたが、その変容効果の持続性と行動変容に対する影響は今後の課題として残された。

キー・ワード：聴覚障害 態度変容 テレビ視聴

I. はじめに

一般の人々の障害者に対する態度やイメージを好意的な方向に変容させるためにどのような方法を用いればよいかについて、講義法、障害者による講演法、障害者への援助体験法、車いすや目かくしを用いて障害の擬似体験をするシミュレーション法、読書法、教材作成法、啓蒙活動参加法などの方法が考案され、その効果が詳細に検討されている(徳田, 1990 a³⁾)。それぞれの方法については態度変容やイメージの変容に大きな効果があるものの、欠点も有しており、その使用に関しては十分な配慮が必要であることが指摘されている。

1981年の国際障害者年以來、テレビや新聞・雑誌等で障害者に関する映像や記事にふれない日はないくらい、「障害者」は日常的存在になってきている。特にテレビでは、ニュースやドキュメンタリー番組で「障害者」が取りあげ

られることが多く、多くの人たちが視聴している。映像を媒体として「障害者」と接触する方法は、間接的で、かつ structured な接触法であり、いくつかの先行研究によってその効果が実証されている。

例えば、Donaldson (1976¹⁾) はビデオで45分間障害者を見せることによって、被験者の態度が肯定的な方向に変容したことを報告している。また、津曲 (1988²⁾) は福祉教育における映像の効果を実践的に検証し、実際に大学の授業に導入して効果をあげている。さらに、Sedlick and Penta (1975²⁾) は四肢まひを持つ障害者がリハビリテーションを受けている場面を17分間見せることによって、視聴者の態度が好意的な方向に変容したことを確認している。

もちろん変容効果はその実験に用いた映像の内容に大きく依存することは明らかであるが、重要なことは実験者が最大限の変容効果を企図して用意した映像によって、視聴者の態度がどのように変容するかを客観的に評価するところ

にある。つまり、視聴覚教材によって障害児・者に対する態度の変容が可能かどうかを確認することであり、その効果が確認できれば学校教育や社会教育の中での福祉教育において、視聴覚教材をどのような配慮のもとに使用すればよいかを示唆される。

本研究では保育者養成校（短期大学）の授業の一時限を用いて、著者らがこれまで授業で使用したビデオ教材のうちで最も態度の改善に効果的と思われ、また社会的な評価も高いテレビ番組の録画を使用することによって、視聴者の聴覚障害者に対する態度がいかに変容するかを検討した。

II. 方法

1. 被験者

東京成徳短期大学幼児教育科2年生93名を被験者とした。被験者は全員女子であり、年齢は19歳から21歳であった。被験者を選ぶにあたっては、家族や知人に障害者がいないことを条件とした。

ビデオ視聴後、実験に用いた番組を過去に見たことがあったかどうかを尋ねたところ、12名の被験者が視聴した経験があると答えたので、その12名を除いた81名の被験者のデータのみを分析の対象とした。

2. 態度の測定

態度を測定するために「障害児・者の態度を測定するための多次元的态度尺度：聴覚障害版」(徳田, 1990 b⁴⁾)をプリテストおよびポストテストとして用いた。この尺度は聴覚障害児・者に対する一般の人の態度を測定するものとして最適である。それは結果を多次元的に解釈できるため、従来から用いられている尺度のように「好意的か、非好意的か」といった一次元的な解釈につながらないからである。この尺度は全体で5つの次元から構成されており、ひとつの次元は10項目から成っている。回答者は各項目について7段階評価を行うことになる。

5つの次元とは、1.共に生きることへの拒否(拒否的態度)、2.統合教育、3.特殊能力、4.

依存的な自己中心性、5.交流の場での当惑、である。この尺度を論文末尾に資料として付した。

3. 実験に用いたビデオ教材と実験の手続き

今回用いたビデオ教材は日本テレビ製作「ななえちゃん明日が聞こえるね」(50分)であった。この番組は聴覚障害児である両親が健聴の女兒を苦勞をしながら育てていく内容であり、感動的なシーンも多い。この番組によって、聾者の生活やそれを取り巻く問題、障害者の子育ての苦勞などを知ることができる。

実験は、まずプリテストをおこない、その1週間後に録画してあった上記の番組を視聴させ、その後ポストテストを実施し、同時に自由記述による感想を書かせるという手続きをとった。プリテスト、ポストテストの実施にあたっては、それぞれの項目に回答する場合にあまり考えすぎないこと、調査用紙には自分の氏名は記入せずペンネームを記入することの2点を教示した。この手続きによって、実験者が被験者を同定することができず、そのため従来から指摘されている「質問紙による態度調査における社会的に望ましい方向への反応の偏り」を基本的に解消できると考えた。

III. 結果と考察

Fig. 1 に次元別にみた多次元的态度尺度の得

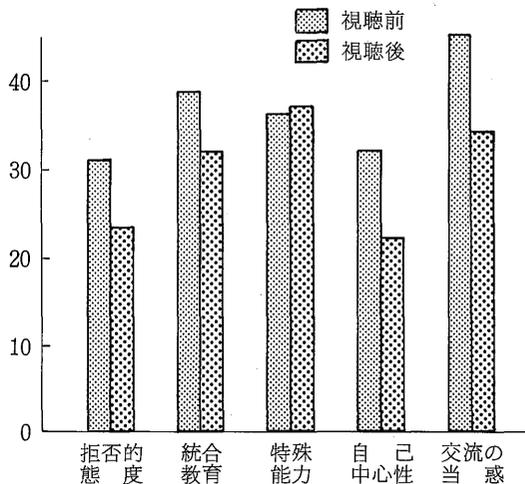


Fig. 1 多次元的态度尺度の得点の変化

点の変化を示した。この尺度ではすべての次元で得点が低いほうが態度が好意的であると一般的に解釈される。全体的にみると、映像視聴の前後において得点が大きく変化していることがわかる。統計的には「特殊能力」以外の4つの次元において有意な差が認められた（拒否的態度, $t=10.64$; 統合教育, $t=8.98$; 特殊能力, $t=1.90$; 自己中心性, $t=12.07$; 交流の当惑, $t=11.57$; すべて $df=80$; 特殊能力以外は $P<0.01$; 対応のある t 検定を使用)。

「拒否的態度」の次元は、聴覚障害者と共に働いたり、聴覚障害者を仲間に入れることへの拒否的傾向を表す次元である。この次元に大きな得点の低下があったことは、聴覚障害者を受容する方向に態度が変容したことを示している。この次元における有効な態度変容技法には、障害者による講演法、読書法、障害者への援助体験法、シミュレーション法などがあるが（徳田, 1990 a³⁾）、いずれの方法も共感や感動といった情緒的反応が強く生起するものであった。本実験で用いた映像も被験者の強い情緒的反応を引き出しており（自由記述による感想から確認された）、この次元の態度の改善に至っていると考えられる。

聴覚障害は盲や運動障害とは異なり、それ自体は visible ではない。その意味では被験者はステレオタイプの拒否的態度をもつことは少ないであろうが、聴覚障害の実態があまりよく知られていないことやコミュニケーションの取り方がわからないことなどから、積極的に受容しようとする態度もみられない。そのような、明確な態度が形成されていない不安定な状態に、情緒的反応を強く引き出す刺激が与えられると、映像の意図する方向に視聴者の態度が大きく変容しやすくなる。今回用いた映像を、聴覚障害に関して認識の深い被験者に見せた場合には、今回の結果ほど大きな変容の幅は示されないであろう。

「統合教育」の次元においても大きく尺度得点が低下し、統合教育を認める方向に態度が変容する結果となった。この次元の変容は統合教

育の情報が与えられるかどうかのポイントになる。今回用いた映像では統合教育の場が直接的に扱われたわけではないが、全聾者である父親が健聴者とともに子供の父兄参観や運動会に参加する場面がある。

徳田 (1990 a³⁾) によると、視覚障害者に対する態度変容に関しても、この次元の変容は統合教育の情報の有無が結果を左右することが確認されており、映像で取りあげられる対象に関わらず、比較的容易に唱導方向への変容効果が現れる可能性が高い次元であると言えよう。

「特殊能力」の次元は、尺度得点が高いほど「聴覚障害者はいろいろな能力があり、記憶力が非常によく自分たちにはわからないことまでわかってしまう特殊能力を持っている」と感じている傾向が強い。つまり実際とはかけ離れた「聴覚障害者観」を持つほど尺度得点が高くなるのである。今回はこの次元の変容は認められていない。ポジティブな方向への変容が認められなかった理由として、今回の映像法のように情緒的反応を強く引き出す方法では障害に対する客観的な認識を形成しにくく、聴覚障害者の能力の正しい評価につながらないことがあげられる。またネガティブな方向への変容が生じなかったのは、映像の中のコミュニケーションの手段が口話法でなく、被験者に比較的なじみのある手話であったことが挙げられよう。

この次元の態度の改善には科学的な知識を整理した形で伝える講義法が有効であることが確認されている（徳田, 1990 a³⁾）が、今回の実験では講義を条件の中に入れておらず、客観的な情報を被験者に与える機会もなかった。また、盲人の点字触読や歩行の映像が何の解説もなく被験者に与えられた場合「特殊能力を持つ盲人観」が強まることが確認されている（徳田, 1990 a³⁾）ことから、健聴者からみると特別な能力を必要とするであろうと思われる口話法が強調された場合、この次元の態度はネガティブな方向に変容するであろうと思われる。

「自己中心性」の次元は、得点が高いほど「聴覚障害者は他人に対して手伝わってもらうことを

当然と考えており、自己中心的な性格である」という見方をしている。今回は大きくこの次元の態度が改善したが、これには今回用いた映像がふたりの聴覚障害者（子供の両親）の生き方やパーソナリティを肯定的にとらえていることが大きく影響している。

「交流の当惑」の次元では、得点が高いほど聴覚障害者との交流の場においてとまどう傾向が強いことを示しているが、今回は大きく得点が低下し、この次元の態度が改善される結果となっている。この次元の態度の改善は実際の援助行動の発現に通じるものであり、その意義は大きい。

映像によって、聴覚障害者とのコミュニケーションの具体的なとり方を認識することができ、接触に対する「心構え」が形成されたことがこのような結果につながったと思われる。つまり、この次元の態度変容では、具体的な交流の方法の提示がポイントになるのである。

自由記述による視聴後の被験者の感想を分類したところ、障害や両親の生き方を好意的にとらえているものが大半であった。他の特徴的な感想として、両親が聴覚障害者でありながら子どもにそれが遺伝しないことに驚いた（30%）、4歳で手話ができることに驚いた（19%）、幼稚園教諭になる自分も手話の必要性を感じた（8%）などがあった。今回の感想の中に出てきた疑問や誤解に関しては、後日の授業において解説を行い、被験者に正しい認識を持たせるように配慮した。「やりっぱなしの態度調査」ではなく、調査や変容活動によって被験者に生じた疑問や誤解を解消する手続きを用意しておくことは、この種の研究においては不可欠のことと考えられる。

まとめ

今回の映像法のように情緒的な反応が強く引き出される方法では、障害に対する客観的な認

識を被験者に持たせにくいという欠点があるが、反面、障害者と共と同じ社会で協力しているようにする反応が生起される効果が強いという長所があることが確認された。このことから変容効果を大きくするためには、被験者の情緒的反応を生起させる方法を用いることが第一であり、加えて客観的な認識を被験者に持たせる工夫（講義法や読書法の併用）をすべきであることが示唆される。

なお、今回用いた映像が保育者養成校の学生ではなく、他の視聴者に対しても同様な態度変容効果を持つか、また映像法が他の障害を持つ人に対する態度の変容に効果を持つか、さらにその効果の持続性と援助行動の発現の可能性はどうかについては今後の課題とし、継続的に研究に取り組んでいきたい。

文献

- 1) Donaldson, J. (1976): Channel variations and effects on attitudes toward disabled persons. *Audio-Visual Communication Review*, 24, 135-143.
- 2) Sedlick, M. and Penta, J.B. (1975): Changing nurse attitudes toward quadriplegics through use of television. *Rehabilitation Literature*, 36, 274-278.
- 3) 徳田克己 (1990 a) : 視覚障害児・者に対する一般人の態度を改善するための技法とその評価. *視覚障害心理・教育研究*, 7 (1.2), 5-22.
- 4) 徳田克己 (1990 b) : 障害児・者に対する態度を測定するための多次元的态度尺度の開発 (1)—全体構成と妥当性の検討—. *桐花教育研究所紀要*. 3, 21-29.
- 5) 津曲裕次 (1988) : イラストとミニマム・エッセンシャルでつづる障害者の教育と福祉入門. 川島書店.

—1990.10.11.受稿, 1990.11.13.受理—

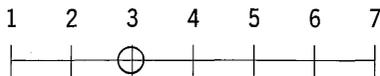
資料

障害児・者の態度を測定するための多次元的態度尺度：聴覚障害版

*次にあげた質問は、耳に障害がある人について、世間一般の人々が述べた意見です。あなたは、その意見に対してどのように思うかを、7段階尺度で答えてください。あまり考え過ぎないようにして○をつけてください。

評価尺度	1. 非常に賛成							
	2. かなり賛成							
	3. どちらかといえば賛成							
	4. どちらともいえない							
	5. どちらかといえば反対							
	6. かなり反対							
	7. 非常に反対							
		非常に賛成	かなり賛成	どちらかといえば賛成	どちらともいえない	どちらかといえば反対	かなり反対	非常に反対

○のつけかた

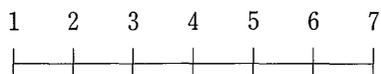


- | | | | | | | | |
|------------------------------------|-------------------------------------|---|---|---|---|---|---|
| 1. 耳に障害のある人と一緒に仕事をしてみたい。 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 |
| | ----- ----- ----- ----- ----- ----- | | | | | | |
| 2. 耳に障害のある子供も普通の学校で教育するのが一番良い。 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 |
| | ----- ----- ----- ----- ----- ----- | | | | | | |
| 3. 耳に障害のある人は、超能力をもっているわけではない。 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 |
| | ----- ----- ----- ----- ----- ----- | | | | | | |
| 4. 耳に障害のある人は、相手のことをよく考えて物ごとをおこなう。 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 |
| | ----- ----- ----- ----- ----- ----- | | | | | | |
| 5. 耳に障害のある人にも気軽に声をかけられる。 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 |
| | ----- ----- ----- ----- ----- ----- | | | | | | |
| 6. 耳に障害のある人と積極的に交流したい。 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 |
| | ----- ----- ----- ----- ----- ----- | | | | | | |
| 7. 普通学校でも耳に障害のある子供を十分に教育することができる。 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 |
| | ----- ----- ----- ----- ----- ----- | | | | | | |
| 8. 耳に障害のある人はあまり敏感ではない。 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 |
| | ----- ----- ----- ----- ----- ----- | | | | | | |
| 9. 耳に障害のある人は手伝ってもらうことを当り前とは思っていない。 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 |
| | ----- ----- ----- ----- ----- ----- | | | | | | |

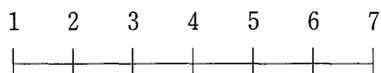
- | | |
|--|-------------------------|
| 10. 耳に障害のある人にためらいなく、ものを尋ねることができる。 | 1 2 3 4 5 6 7
 ----- |
| 11. 耳に障害のある人と喜びや楽しみを分かち合うことができる。 | 1 2 3 4 5 6 7
 ----- |
| 12. 耳に障害のある子供は普通の学校に入ること多くの経験をすることができる。 | 1 2 3 4 5 6 7
 ----- |
| 13. 耳に障害のある人は、障害のない人よりも、いろいろな感覚が優れているわけではない。 | 1 2 3 4 5 6 7
 ----- |
| 14. 耳に障害のある人は、決して自分の境遇に甘えているわけではない。 | 1 2 3 4 5 6 7
 ----- |
| 15. 耳に障害のある人を見ると、迷わず手を貸すことができる。 | 1 2 3 4 5 6 7
 ----- |
| 16. 耳に障害のある人を自分たちの仲間に入れることに抵抗感はない。 | 1 2 3 4 5 6 7
 ----- |
| 17. 耳に障害のある子供は、普通の学校で教育を受けることが望ましい。 | 1 2 3 4 5 6 7
 ----- |
| 18. 耳に障害のある人が、特にがまん強いというわけではない。 | 1 2 3 4 5 6 7
 ----- |
| 19. 耳に障害のある人は、空想でものを言うことはない。 | 1 2 3 4 5 6 7
 ----- |
| 20. 耳に障害のある人と抵抗感なく話ができる。 | 1 2 3 4 5 6 7
 ----- |
| 21. 耳に障害のある人に部屋を貸すことができる。 | 1 2 3 4 5 6 7
 ----- |
| 22. 耳に障害のある子供は、普通学校の中でも十分に活動することができる。 | 1 2 3 4 5 6 7
 ----- |
| 23. 耳に障害のあるほとんどの人が、人並み以上にすぐれた芸術的才能を持っているというわけではない。 | 1 2 3 4 5 6 7
 ----- |
| 24. 耳に障害のある人は、他人に対して親切である。 | 1 2 3 4 5 6 7
 ----- |
| 25. 耳に障害のある人が困っているとき、迷わず援助できる。 | 1 2 3 4 5 6 7
 ----- |

- | | |
|--|-------------------------|
| 26. 耳に障害のある人と一緒に楽しく生活することができる。 | 1 2 3 4 5 6 7
 ----- |
| 27. 耳に障害のある子供は、事情が許せば、普通学校へ入ったほうが良い。 | 1 2 3 4 5 6 7
 ----- |
| 28. 耳に障害のある人は、障害のない人よりも、忍耐力があるわけではない。 | 1 2 3 4 5 6 7
 ----- |
| 29. 耳に障害のある人の態度はひかえめで謙虚である | 1 2 3 4 5 6 7
 ----- |
| 30. 耳に障害のある人も自分と同じ世界に生きている | 1 2 3 4 5 6 7
 ----- |
| 31. 耳に障害のある人は、施設などで生活するよりも一般社会のなかで生活するほうが良い。 | 1 2 3 4 5 6 7
 ----- |
| 32. 耳に障害のある子供は、普通学校のなかで安全に生活することができる。 | 1 2 3 4 5 6 7
 ----- |
| 33. 耳に障害のある人が特に「普通の人を感じないことまで分かってしまう」ということはない。 | 1 2 3 4 5 6 7
 ----- |
| 34. 耳に障害のある人は、いつも他人の援助を待っているわけではない。 | 1 2 3 4 5 6 7
 ----- |
| 35. 耳に障害のある人ともコミュニケーションをとれる。 | 1 2 3 4 5 6 7
 ----- |
| 36. 耳に障害のある人は、すべての面で劣っているわけではない。 | 1 2 3 4 5 6 7
 ----- |
| 37. 耳に障害のある子供は、特別の学校よりも普通の学校のほうが個性をのぼすことができる。 | 1 2 3 4 5 6 7
 ----- |
| 38. 耳に障害のある人も、ない人も記憶力は同じである。 | 1 2 3 4 5 6 7
 ----- |
| 39. 耳に障害のある人は、援助がなくても多くのことができる。 | 1 2 3 4 5 6 7
 ----- |
| 40. 耳に障害のある人と付き合うときには、あまり気をつかいすぎない。 | 1 2 3 4 5 6 7
 ----- |
| 41. 耳に障害のある人の福祉を慈善事業に任せるだけではいけない。 | 1 2 3 4 5 6 7
 ----- |

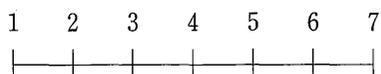
42. 耳に障害のある人に適した授業は、普通の学校でも十分にできる。



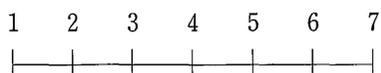
43. 耳に障害のある人が、他の人が何を考えているかを敏感に感じとれるわけではない。



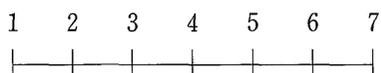
44. 耳に障害のある人は、いろいろなことに希望を持っている。



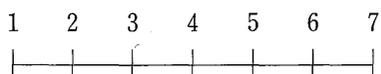
45. 耳に障害のある人に対して、変な遠慮はしない。



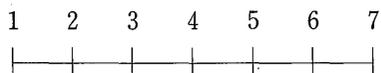
46. 耳に障害のある人と、友人になりたい。



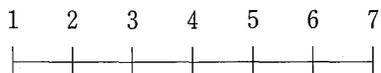
47. 耳に障害のある子供を普通の学校に入れると、お互いの理解が深まる。



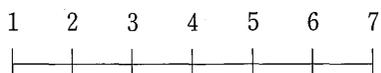
48. 耳に障害のある人は、話し相手の性格や心のなかを理解する特別な能力を持っているわけではない。



49. 耳に障害のある人は、いつもきちんとしている。



50. 耳に障害のある人に対して関心がある。



Changing Attitudes toward Hearing Handicapped Person through Use of Television

Katsumi TOKUDA

This study tested the effects of watching television about persons with hearing impairment on students' attitudes toward hearing handicapped persons. The sample for the study consisted of 81 women's college students aged 19 to 21. The Multi-Dimensional Attitude Scale toward Hearing Handicapped Person was administered as a pre and post test.

The pre-post scale differences generally indicated a positive change in attitudes toward hearing handicapped persons. In four area, "refusal", "integration", "egocentrism" and "perplexity", a positive change was confirmed. In only one area, "special ability", both a positive change and a negative change were not confirmed.

This study demonstrated that watching television can change students' attitudes toward the hearing handicapped. Whether this would persist as a long-term effect and whether it would result in behavior change will require further study.

Key words : hearing handicapped, changing attitudes, watching television